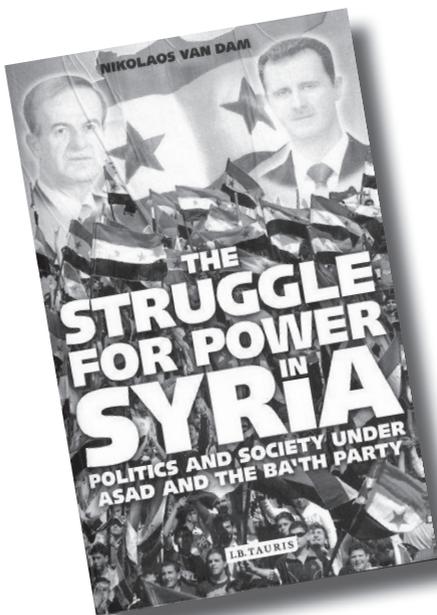


【選評】
東京大学准教授
池内恵

シリア・アサド政権の 支配構造



The Struggle for Power in Syria:

Politics and Society Under Asad And
the Ba'ath Party,

Nikolaos Van Dam

London, I. B. Tauris, 2011

(4th Edition, Originally Published in 1979)

二〇一一年初頭以来のアラブ諸国での反体制抗議行動の波がシリアに及ぶか、中東専門家の間で意見は分かれた。シリア・ウォッチャーには、「もちろん及ばない」と（なぜか得意

げに）断言する向きが目立った。それはバッシヤール・アサド大統領の口吻をどこか想起させた。二〇〇〇年に父ハーフィズ・アサド大統領から政権を世襲したバッシヤールは、

エジプトで反政府デモが盛り上がる一月三十一日の「ウォール・ストリート・ジャーナル」紙上で、「シリアは安定している。なぜか？ それは民衆とより密接に結びついているからだ」と豪語した。

インターネット上で二月四日を「怒りの日」としてデモが呼びかけられたが、不発に終わると「シリアではデモは起こらない」と論じる立場は一層勢いづいた。しかし三月十五日に南部の小都市ダラアでの小規模なデモに政府が過酷な弾圧を加えたことをきっかけに、三月十八日に「尊厳の日」と銘打った大規模デモが発生し、じわじわと各地・各都市に広がっていった。一月初頭の時点まで、混乱は収まっていない。国連難民高等弁務官事務所の一二月八日の発表によれば、少なくとも三五〇〇人が殺害されたという。

シリア政府系のメディアの報道・宣伝と、アル・ジャジーラなどシリア外部のアラビア語メディアの報道では、まるで正反対の描写がなされる。シリア政府系メディアは、執拗・体系的に体制批判者に人格攻撃を加え、あからさまな偽情報、攪乱を意図した怪情報も入り交じるため、よほどの「アサド・マニア」以外は、ほとんど誰もまともに取り合っていないだろう。アル・ジャジーラは明確に反政府デモ支持の立場だが、記者が現地に入れず、インターネット情報をウォッチして伝えることが中心で、決定力・厳密性に欠ける。

断たれた国民との「つながり」

アラブ諸国の権威主義体制を論じる際に、よく引き合いに出されるのがトルストイ『アンナ・カレーニナ』の冒頭の一節だ。「幸福な家庭はみな似通っ

ているが、不幸な家庭は不幸の相もさまざまである」（上藤精一郎訳）。チュニアとエジプト、リビアとシリアのそれぞれが、いずれも政治的自由を制限する抑圧的な政治体制を擁してきたが、そのあり方はさまざまだ。大規模デモの出現の仕方にも、それに対する政府の対処の仕方にも、偏差が明らかになってきた。

シリアの場合、デモの立ち上がりは遅く、広がりや腰も重かった。当初はおおおと改革要求を掲げた。ただし一旦始まると、粘り強い。チュニアやエジプトのように首都の中心部に集結して政権に正面からぶつかっていくのではなく、各都市の各街区でそれぞれに集まり、弾圧の犠牲者を減らすために夜に集まる、といった駆け引き面でも細やかだ。一方政権側も、首都ダマスカスやそれに並ぶ規模の都市アレppoの中心部は強固

に守り、デモを起こさせていない。忠誠心の高い精鋭部隊が各地を巡り、執拗に弾圧を加え、各地でならず者組織「シャッビーハ」が猛威を振るうなど、特有の陰湿・陰険な性質を露わにしている。

政権はデモを終結させられず、デモにも一気に政権を倒す力はない。膠着状態が続く。しかしかつての「ステータス・クオ」には戻れないだろう。バツ「シャルル・アサド大統領が豪語した政権と国民との密接なつながり、イデオロギー的な正統性が、明らかに毀損した。政権がシリア内部で立てこもって一定期間存続したとしても、レバノンやパレスチナ、イラクなどに影響力を行使することで成り立っていた地域・国際的な威信に、致命的な打撃が加えられた。その場合、シリアの経済力に比して過分に与えられていた国際的な関心や政治力は低下する。そ

れらはアサド政権の基盤そのものでもあった。

熾烈な権力闘争を詳述

シリア流のデモと弾圧には、シリアの近代国家形成が引きずってきた固有の問題が明瞭にあらわれている。それは「宗派主義 (sectarianism)」と「地域主義 (regionalism)」である。アサド父子の政権中枢を、イスラーム教の異端ともされる少数派アラウィー派が多く占めることは広く知られているが、なぜ、どのようなにしてそのような政権構造が成立したのか。これについての定評の高い、まさに良い意味での権威的な著作が、本書『シリアの権力闘争——アサドとバアス党支配下の政治と社会』である。初版は一九七九年で、版を重ねるごとに増補され、最新のものが今年刊行された。ただし二〇一



シリア各地に広がる反政府デモ (2011年10月15日、ダマスカス市内)
(ロイター/アフロ)

年の争乱発生以前に改訂を終えているため、今年の事象は取り上げられていない。しかしアサド政権の現在の行動様式とその根拠を理解するた

めにも、必読の書だろう。著者がこの本の初版を刊行した時点では、アサド政権の権力基盤の研究は、純然たる現状分析だった。

一九五八〜六一一年のシリアとエジプトの合邦とその破綻によるシリアの分離を経て、クーデタが相次ぐシリア政治の混乱は加速した。一九六三年にバアス党がクーデタで権力を奪取した後も政策は左右に振れ、一九七〇年に当時国防相だったハーフィズ・アサドが権力を掌握して後、やっと安定がもたらされる。アラウィー派、ドゥルーズ派、ギリシア正教徒、南部ハウラーン地方出身者といった宗派・地域的な紐帯で繋がる少数派が軍將校層で多数を占めていき、その中でアラウィー派が権力を掌握し、数少ないスンナ派有力將校が追放・制圧され、さらにドゥルーズ派將校も肅清された後、今度はアラウィー派内部での権力闘争が行われて、最終的にアサド一家に権力が集中し、政権の確立・安定化に至る。

この熾烈で凄惨な権力闘争が、淡々

と、データに基づき記述される。このアサド政権が長期化し、息子バツシャールに継承されたことで、本書は徐々に歴史書としての価値が認められてきた（今回の増補は、主に引退あるいは離反したアサド政権幹部の回顧録などから得られたデータを加えることが主眼である）。そしてアサド政権が揺らいだ現在、現状分析の確かな根拠として再び参照されるようになっていく。

伝統の超克と回帰

本書の一貫したテーマは、著者のいう「シリアのバアス党政権が、一九六三年の権力掌握以来、繰り返して直面してきたパラダイムの状況」である。「党あるいは党内部の派閥が、宗派や、地域や、部族の忠誠心を超克しようというイデオロギーを追い求めるにもかかわらず、一旦権力を掌握

すると、その権力を失わないためには、多かれ少なかれこういった伝統に基づく忠誠心に立ち返らざるを得なくなる。その権力はそもそも「これらの伝統的忠誠心を克服するという」イデオロギーを実現するために必要とされていたのだが」（七四頁）。

著者ニコラオス・ファンリダムは一九四五年生まれのオランダの外交官で、元来の専門はシリアだが、イラク、エジプト、インドネシア、ドイツなどの大使を歴任している。オランダというそれほど大きくない国の外交官が、旧植民地でもない国についての、学術的世界で長期にわたって参照される決定的な書物を著し、生涯をかけてそれを増補し続けてきたというのは、まことに麗しき事例と言っしかない。■